

はにい「インクルーシブな考え方で教育を実践（下）～柔軟な環境づくり～」

令和8年3月19日

●支援員は個でなく場につく

教室の片隅に1人分の机と椅子。この学校では、各教室にそんな場所がある。

「ん～、むずかしい…わかんない…」つぶやきの声に、その机に座っていた大人が「友だちと相談してもいいんだよ」と話し合いを促し、子ども同士の学び合いが広がっていった。また、教科書の漢字の読み方に苦戦している子が多い場面では、その状況について授業者に情報を伝えると、授業者が全体へ「わからない字があったら、ICTを使っていいよ」と声をかけ、学習ツールの選択の幅が広がった。

支援は特定の誰か＝『個』につくものではなく、『場』につくもの。そんなインクルーシブな考え方で支援をしていこうと、ある市町村では独自の支援員を配置している。「支援の必要な〇〇さん」ではなく「みんな支援が必要になることはある。その時と場所がちがうだけ」まさに、神奈川の支援教育を根底にした取組だ。支援員は、普段は教室の隅で、そっとみんなを温かく見守ってくれる存在。でも、困った場面では、だれでも支援が受けられる、そんな安心感のある学びの場がここにはある。



●子ども自身が「学びの環境」を柔軟に調整

子ども同士が話し合ったり、作業したりしやすく、柔軟に組み合わせることができるローテーブル。ぺたりとおしりをついて座れるマット。この学校では、教室の外にも協働の場を設けている。



「次はみんなで話し合いたいからさ、丸くなるように机をくっつけよう」「これから作業するから、机はどけて、床を広く開けてやろうよ!」「オッケー」この場所は、子どもたち自身で学びたい形をデザインして変更する。自分たちの学びやすい形を話し合いながら作ることで、学びにくさを感じる子も自分が学びやすいように調整ができる。支援は、なにも大人が直接子どもを助けるものだけではない、子ども自身で「学びの環境」を柔軟に調整できる環境作りも大きな支援だ。

かながわ元気な学校づくり通信『はにい』とは、

学校が元気になるように・・・

先生の仕事を受けとる

学校に携わる大人たちがしていることを受けとる

そして、もちろん子どもたちの育ちを受けとる

そんな、コミュニケーションツールです。みんなで語り合しましょう。

専用メールアドレス：inochi4027@pref.kanagawa.lg.jp